

## 雑 報

553.61 : 550.85(521.76)

### 奈良縣郡山粘土鉱床概査報告

赤肌焼の原料である郡山粘土鉱床の概査を元奈良県副知事松尾友雄より依頼され、昭和28年1月12・13日現地踏査を行った。この粘土鉱床は、終戦後は採掘が休止されており、これを再興するについて、残存鉱量の如何が重要な問題であり、本調査においても重点をこの鉱量の探査においた。

粘土鉱床は郡山町の西方5km、生駒山脈の山頂に近く、生駒郡矢田村地内にある。郡山町より矢田村宇寺村までの道路は平坦良好であるが、金剛寺より山頂までは急峻な山路で徒歩によらねばならぬ。

地質は粗粒黒雲母花崗岩よりなり、これを不整合に覆って洪積層が発達し、粘土鉱床はその一員に属する。地表は山頂近くまで畑地となり、よく開墾されている。

鉱床は山頂近くにあり、花崗岩を基盤として不整合に堆積した白色粘土層が採掘され、旧坑は2、3カ所あるが、坑口がまつたく埋没して詳細を明らかにし難い。

露頭より観察すると、白色の粘土層があり、その上部によく淘汰された石英砂層が堆積し、さらに上部には古生層の小さい岩礫を有する砂層が発達し、最上部には花

崗岩の巨礫を有する砂礫層がのつている。

露頭と旧坑の位置から判断すると、走向はほぼEWで、10~20°Nの緩い傾斜を示していることが判り、所有権者の北畠氏の言によれば、旧坑附近はほとんど採掘済である。

しかし、傾斜の連続方向はいまだまつたく探鉱されたことがない処女地帯であつて、この部分の探鉱が今後鉱量を確定するために肝要と考えられる。

さしあたり、この部分に深さ最大20mの試錐を最小限度3本実施すれば、この部分の粘土鉱床の賦存状態が明らかとなり、従つてその鉱量を把握しうる。

品位は京都工業試験所の最近の分析結果によれば、SK33番であつて、良質であり、また古くから赤肌焼として地方的には有名な焼物の原料として使用されてきたもので、鉱量さえ確保すれば、再開の道は拓かれるものと考えられる。

なお終戦前には北畠氏は大阪方面へも該粘土を販売したことがある。

(原口九万)

553.551 : 550.85(521.71)

### 三重縣椿、庄内村石灰石鉱床調査報告

三重県総合開発に関連して、題記石灰石鉱床の賦存状態、品質の概略を調査した。

本鉱床は鈴鹿山脈の南部、仙ヶ嶽東方山麓部(5万分の1地形図、龜山)にあり、鉱床賦存地から12~13kmで関西線笠戸駅に達するが、その間、大量かつ重量の鉱石をトラック輸送をするには現在の道路は不適當である。また、この地域の積雪は比較的少なく、鉱山作業にはむしろ降雨による支障が大きいと思われる。

石灰岩は古生層の一員として存在し、数層認められる。以下各地区ごとに述べる。

椿村地区：御幣川南岸の石大神は一大ピラミッド状をなす石灰岩で、これに連なるものは西方山腹の急峻な崖をなし、その麓部は御幣川の溪谷で、採掘および輸送

上はなはだ障害となつている。御幣川北岸の東西に走る石灰岩層は西大神附近を通る断層によつて区分され、その東部のものは地形的にみて採掘に最も好適と思われる。このブロックに相当するものをAとし、断層から西方には、これに続くものが数層東西に並列する。この附近は急峻であるが、採掘に当り多少の準備時日をかければ充分利用できると思われる。この数列の内北端の最も厚いものをBとする。

AおよびBの石灰岩はやゝ微晶質の部分もあるが、一般に白色または白地黒縞を有する非晶質のもので、僅かにAとBの境附近の断層部分に鉄質のものがある。これは量的に大した影響もなく、充分使用に堪えると考えられる。

予想鉱量は、石大神前の北岸道路地並上をとれば、約

試料番号	塩酸不溶残渣	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	P	MgO	Ig. loss	特徴	産地
1	0.10	0.15	55.00	0.04	tr.	0.87	43.62	結晶質灰白色	B
2a	0.15	0.28	55.00	0.28	0.008	0.51	43.55	結晶質薄茶色	B
b	0.30	0.16	38.29	0.10	0.02	16.16	45.87	非晶質灰黒色	B
3	0.15	0.09	55.50	0.08	0.023	0.40	43.49	非晶質乳白色	A
4	0.20	0.20	55.12	0.04	0.05	0.77	43.40	結晶質銀白色	A

(三重県工業試験所分析)

数100万tとなり、Bに並行するものを加えればさらに鈹量は増大する。

任意試料による品質は上の通りである。

庄内村地区：上野の北西奥の谷に石灰石丁場がある。やゝ微晶質白色の美麗なものであるが、断層に切られかつ地表浅い部分は岩屑となり、採掘中のものはこの部分の塊礫である。さらにこの北部に比較的安定した1

層があり、厚さ約30m、やゝ良質のものと思われる。たゞし地形上採掘運搬にはなほ困難がある。なおこれらの延長と推定され、断層から東部に位置するものは、破碎擾乱され、かつ地形の悪いことから大量の稼行対象とはなり難いであろう。

(調査：大塚寅雄、抄録：小関)

553.41 : 553.27 : 550.85 (521.44)

福井縣大野郡・今立郡下金鈹床調査報告 (特に鈹脈の構造について)

1. 昭和27年8月13日より27日に亘り、大野・今立両郡下の池田村・上池田村・上味見村・下味見村に跨る変朽安山岩に関係ある金鈹床地帯を踏査した。

2. 調査した鈹山は北より小当見鈹山・荒谷鈹山・中瀬鈹山・西青鈹山・蒲沢旧坑の5鈹床であつて、いずれも変朽安山岩中に胚胎する含金石英脈で稀に輝安鈹をともなう。

3. 本地域の変朽安山岩は大野町の西方に広く分布し、古期堆積岩(古生層および中生層)を被覆している。変朽安山岩の分布する鈹床地帯の西方には、足羽川に沿つて、花崗斑岩一角閃花崗岩—黒雲母花崗岩の一群の酸性深成岩類が比較的広範囲に分布し、中生代手取統を貫ぬき、これに接触変質を与えている。その他変朽安山岩とはゞ同期(第三紀中新世)の噴出と思われるアルカリ粗面岩も認められる。

4. 本地域の東南方の中竜・長野型接触交代鈹床地帯は“藤倉—秋生碎裂帯”(仮称)中の石灰岩を交代した

ものであつて、この碎裂帯註1)はほぼ東西性を示している。またこの期の塩基性岩類を先駆として第三紀に入つてから黒雲母一角閃石花崗岩の底盤体が手取統を貫ぬき、この東西性変動帯に沿つた弱線に貫入した。アルカリ粗面岩・安山岩類(変朽安山岩を含む)の活動は花崗岩の貫入と時間的間隙はないものと思われる。

5. 以上の地質構造より各金鈹脈の裂罅構造について考察すれば、下記のごとくである。

鈹山名	脈の方向	平行脈	裂罅の性質
荒谷鈹山	E-W	多い(7~8条)	張力裂罅
荒谷細木南北脈	N-S	なし(1条)	剪断裂罅
小当見鈹山	N40°E	多い(4~5条)	張力裂罅
中瀬鈹山	N35°W	なし(1条)	剪断裂罅
蒲沢旧坑	N40°W	なし(1条)	剪断裂罅
西青鈹山	N40°E	なし(1条)	剪断裂罅

6. これらの鈹床の経済的価値は、多くを期待することは困難である。

(調査：北卓治、抄録：服部)

註1) 中生代末葉の夜久野—大賀變動期の地殻變動によるもので、手取統の上へ中龍古生層が衝上し、ついで塩基性岩類の貫入をみた。

553.435 : 553.677 : 550.85(521.81) : 622.19

鳥取縣氣高郡鹿野鉍山絹雲母硫化鉄鉍床調査報告

鹿野鉍山は鳥取市の南西直距約15 km の鹿野町地内にあり、交通至便である。

当地域の岩石は石英斑岩を主とし、東部にはこれを貫ぬきあるいは被覆して玢岩と安山岩が存在するほか、これらを覆う火山性礫岩が北方に分布している。

鉍床は浅熱水性絹雲母黄鉄鉍脈で著しい珪化帯を伴っている。鉍脈状のものと鉍筒状のものとがあり、ともに石英斑岩中に胚胎する。これらは交錯して雁行状をなして密集し、1つの鉍床群を形成する。単位鉍体は、前者の型にあつては走向延長10~30m、脈幅1~3mで、後者の型にあつては走向延長5m前後、脈幅2m前後

である。これらの露頭の確認されているものは50有余を算える。

鉍床は石英斑岩中に発達する N15~50°W でNに急斜する節理と関係するものである。

なお深部に向つて相対的に黄鉄鉍を増加し、絹雲母を減少する特色を認めた。その容積比は地下10m以上は絹雲母：黄鉄鉍=50：3であるが深くなるにつれ5：1程度に変化している。

黄鉄鉍は簡単な水篩により硫黄品位40%として採取することができる。附図29葉(昭和27年9月調査)

(調査：清島信之、抄録：岸本)

553.43/.44 : 550.85(521.82) : 622.343/.344

鳥根縣匹見鉍山銅・鉛・亜鉛鉍床調査報告

匹見鉍山は鳥根県美濃郡匹見下村にあり、鉍山現場は石見益田市の東南方直距離約15 km にあつて、山元近くまで車馬の通行が可能である。

附近は標高600~800mの峻険な地形を呈しており、鉍床は標高400~500m附近に分布している。

鉍床附近および一帯の地質は砂岩・粘板岩を主とする古生層を基盤として、これを貫ぬいて角閃石-黒雲母花崗岩があり、さらに花崗斑岩の岩体および石英斑岩・玢岩の岩脈があり、最後に輝石安山岩が古生層を被覆している。

鉍床は花崗斑岩中の裂隙充填鉍脈で走向東西、南に急斜した3本の平行鉍体が賦存してをり、いずれも走向2~3m、鍾幅0.5~1m、傾斜延長に約20mの扁平鉍筒

型の鉍床である。

鉍石は閃亜鉛鉍・方鉛鉍・黄銅鉍を主とし少量の黄鉄鉍を伴ない、また2次鉍物として斑銅鉍・孔雀石が散見される。

一般に露頭近くの上部では閃亜鉛鉍・方鉛鉍を主とし、下部では黄銅鉍が増加する傾向がある。

鉍石の最高品位は Cu 9.28%, Pb 18.77%, Zn 24.09%であり、粗鉍の平均品位は

金山平坑 Pb+Zn 15~20%, Cu 1%以下

長濫坑 Pb+Zn 15~20%, Cu 4~5%

程度であるが、深部の開発が進めば銅鉍が増加する見込である。

(調査：清島信之、抄録：東郷)